

スポーツ実況で解説を求めること

「指名質問」とそれに対する応答

NICT 劉礫岩

1. はじめに

本研究は、スポーツのテレビ実況中継番組において、アナウンサーが解説者からコメントを引き出すやり方の1つを、相互行為的な視点から記述する。番組中のアナウンサーと解説者とのやりとりは、いわゆる制度的場面における相互行為であり(Drew & Heritage, 1992)、解説者は、競技の専門家的な立場であり(是永, 2012; 岡田, 2002)、自ら進んでコメントを行うだけでなく、アナウンサーの質問によってコメントを求められることがある(三宅, 2004)。しかし、専門家として期待されているとはいえ、刻一刻変化する競技の状況については、解説者も常に確たる見解を持っているとは限らない。もしアナウンサーが解説者の考えや見解が十分に固まる前に質問を差し向ければ、解説者の専門家としての立場が損なわれかねない。であれば、アナウンサーと解説者はやりとりにおいて、何らかの仕方での潜在的な問題に対処する必要がある。それがどのようなものであるかを、分析によって明らかにする。

対象となるやりとりは、アナウンサーが画面内の状況に関する自身の見方に対して、解説者を名指して確認を求める発話から始まる。相手から何らかの情報を引き出すために利用できる発話形式が複数考えられるが、本研究のデータでは、この形式の発話が繰り返し観察される。このような発話を「指名質問」と呼ぶことにし、それがどのような場面でなされ、解説者によってどのように応じられ、どのように先述の問題に対処しうるかについて、事例分析を行う。

2. データと方法

データとするのは、「Super GT」という日本で行われるカーレースである。出場車両約40台はエンジン出力によって「GT500」と「GT300」の2クラスに分かれ、同時に同じコースを混走し、それぞれのクラス内で順位を争う。実況は、アナウンサー1人と解説者2人計3人で行われる。2人の解説者のうち、1人はプロレーサー、もう1人はレースのエンジニアを本業とすることが多い。対象となるアナウンサーの指名質問と続く解説者の反応を書き起こし、コレクションを作成した。トランスクリプトでは、「→」がついている発話がアナウンサーによる確認要求であり、「⇒」がついている発話がそれに対する解説者の応答である。

3. 分析

では対象となるやりとりの典型例を断片1で見てみよう。断片の直前において、映像では車両A「カルソニック」が車両Bに追い越されており、アナウンサーGがこの出来事を実況し(データに示されていない)、10行目の発話で締めくくっている。その後も、映像は車両AとBを捉えており(図1(1))、Gはまず「重いし:, 伸びない。」という発話し(12行目)、続けて解説者P(光貞)を名指して、「これもどかしいですね」と発話する(14行目; 図1(2))。

断片1(9) 2015-6 33:38

アナウンサー: G(赤平) 解説者: Y(由良)、P(光貞)

10 G これでペトロナスを除いて、最後方にカルソニックが下がったことになります。

11 (0.6)

12 G 重いし:, 伸びない。

13 (0.9)

14→G まあ光貞さん[これ:, >まあ<(.) もどかしいですね[: (h)

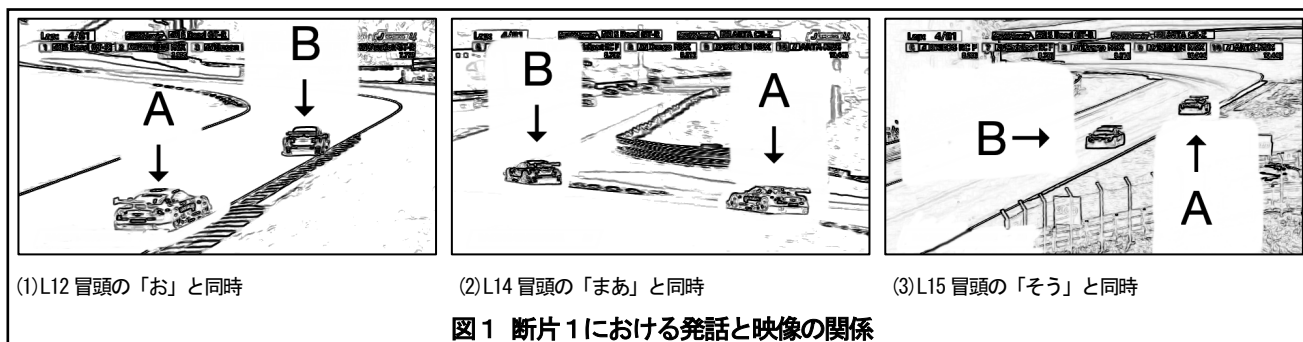
15⇒P [はい。 [そうですね:

16 G [¥え: . ¥

17⇒P [もう重いのはどうしようもないですからね[: : .

18 G [¥ですよね¥

19 . hh ここは耐え忍ぶしかありません。



まずアナウンサーの指名質問と映像との関係について見ていこう。先行の「(車重が)重いし、(車速が)伸びない」という発話は車両Aを捉えており、なぜ車両Aが追い越されたのかを説明している¹。続けて、「これ」によって映像内の状況を改めて指し(劉&細馬, 2017), 「もどかしい」という意見ないし評価を述べる。この発話は、依然車両Aに注目しているが、車両の状態ではなく、車重が重いために追い越されたドライバーの心情にフォーカスしている。またこれは映像から直接観察できるものではなく、「これ」によって捉えた映像内の状況を、そのように見て良いかどうかを問題にしている。このようにGは映像に関する自身の見方をPに差し向けている。

ではGはPにどのような反応を求めているのだろうか。まず、映像内の状況に対する自身の意見ないし評価を述べている意味では、Pに確認ないし同意を求めている。その一方で、「もどかしい」という見方に関しては、本業がプロレーサーであり、ドライバーの心情を経験的に知っていることが期待されるPが権威的な立場である。その意味でGは単に同意を求めているだけでなく、専門家であるPに話題提供をしていると見ることができる(Schegloff, 2007)²。

Gの見方に対して、Pはまず「そうですね」というトークンによって同意するが(15行目)、さらに「重いはどうしようもない」という趣旨の発話を続ける(17行目)。この発話は、Gの「もどかしい」という見方に対する理由づけになっており、プロレーサーとしての経験に基づいている。つまりPは同じ立場からではなく、専門家としてGの見方に同意している。興味深いことに、Gは「ですね」とPの同意を受け取ったあと(18行目)、自身の「もどかしい」ではなく、Pの「どうしようもない」というポイントに着目し、「ここは耐え忍ぶしかありません」とアナウンスしている(19行目)。このように、アナウンサーGは自身の見方に対して確認を求めることによって、解説者Pから専門家としてのコメントを引き出し、それを用いてアナウンスし、映像に車両Aのドライバーの心情に関する見方を提供している。

GとPのやりとりは、追い越しをした車両Bではなく、追い越された車両Aに関するものである。つまりアナウンサーと解説者のやりとりは、映像を「どのように見るべきか」だけでなく、「映像内のどの対象に注目すべきか」をも問題にしている。この点で、次の断片2は断片1にない問題を含んでいる。断片2の直前は追い越しなどの出来事が起きているわけではなく、カメラの切り替えによって、それまでとは別の車両隊列が映像に映し出されている(図2(1, 2))。

断片2(4) 2013-1 0:34:59

アナウンサー：S(下田) 解説者：Y(由良)、F(福山)

((カメラの切り替え、映像はGT300の車両からGT500車両に変わる))

01 S sさて:(1.5)トップはGT500:モジュールオーテック GTR

02 .h二番手エプソン HSV .h HSVの隊列三台です=ケイヒンがいてレイブリック

03→ これはでも：金石年宏もケイヒンがですね由良さん、良[い]ですね：[.]

04⇒Y [はい。 [これは行くでしょうね：.]

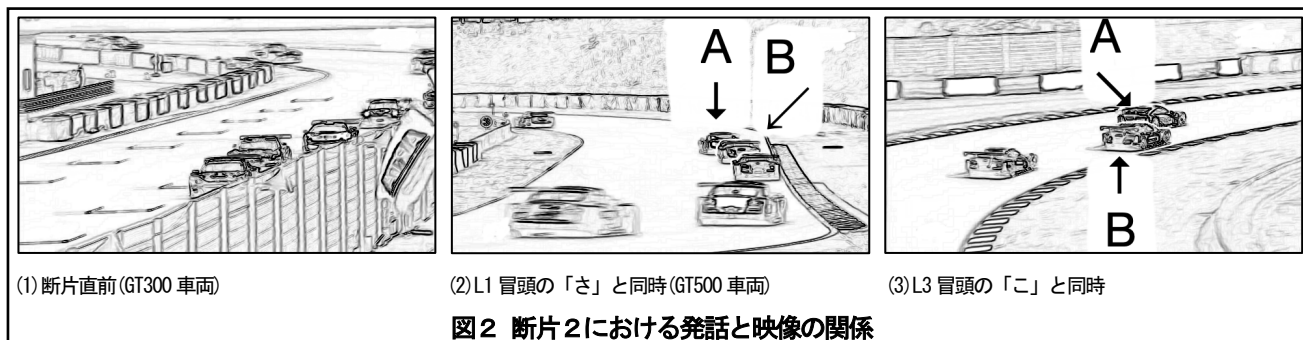
05⇒ でも：まあ道上選手(も)よく頑張ってますね

(>これはく[くる-(.)]苦しいと思いますよ。

06 S [お-

¹ 追い越された車両Aがこのレースで一番重いウェイトハンディを積載しているという情報は、レースの開始前から把握済みのものであり、Gによってアナウンスされている。

² これは同時に、なぜGがPを名指しているかの説明にもなっている。アナウンサーがわざわざ特定の解説者を名指して応答を求めることは、まず、ことばのやりとりを視聴者にとっての理解しやすくする上で重要である。なぜなら番組中にアナウンサーと解説者が画面に映ることは基本ないため、体の向きや視線といった視覚的な方法による宛先の表示は、視聴者に共有されない。また、反対に、解説者がアナウンサーを名指して応答を求めることは稀である。この特定の方法による次話者選択における両者の非対称性は、番組において、アナウンサーが進行役として志向されている証拠とみることができる(Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974)。



映像がGT300からGT500に切り替わったのに対して、アナウンサーSはまず「さて」と映像に注意を促し、映し出された車両名をアナウンスしている(01, 02行目)。続けて、解説者Y(由良)を名指して、画面内2位の車両Bの「金石年宏」選手が「良い」と発話する(03行目；図2(3)；「ケイヒン」は金石年宏選手のチーム名である)。つまりカメラの切り替えによって新たに映し出された車両隊列に対して、Sはその中の車両Bに注目し、それが優勢であるという見方を提示している。それに対して、Yはまず「これは行くでしょうね」と述べる(04行目)。これは、車両Bがこれから追い越すであろうという予想であり、その意味で、「良い」と述べたSに対する同意といえることができる。しかし続けて、Yは「でも：まあ」と逆接し、車両Bの前を走る車両Aについて、「道上選手もよく頑張っている」と述べ、さらに「苦しい」という車両Aの状況と聞かれる発話を続ける(05行目)。これによって、Yは現在の映像を、単に「車両Bが優勢」と見るべきだけでなく、「車両Aも苦しいながら頑張っている」と見るべきだという見解を示している。興味深いことに、断片1と同様、ここでもアナウンサーSは自身の見方ではなく、解説者Yのコメントを取り入れ、締めくくっている(07行目)。このように、解説者はアナウンサーの見方の正しさだけでなく、それによってフォーカスされた対象が、現在の映像を理解する上で十分かどうかについても、専門家として意見を述べている。このようなやりとりによって、新たに映し出され、直前とは不連続であった映像のどこを、どのように注目して見るべきかの教示が提供されている。

ここまでは、アナウンサーの確認要求に対して、解説者はいかに同意しつつ専門家として見解を述べるかを見てきた。解説者の応答が1つのTCUだけで終わるものとして扱われていない点に注意しよう。いずれの事例も、解説者は最初の同意に続けて発話しているだけでなく、断片1では、解説者の「そうですね」に対して、アナウンサーは「え：」と解説者の発話にさらに続きがあるという理解を示している(16行目)。つまり、アナウンサーの確認要求は、基本、解説者から専門家としての見解を引き出すものとして理解されている。しかしながら、解説者は別のやり方によって応答する事例も観察される。次の断片3でそれを見てみよう。

断片2と同じように、断片3も直前にカメラの切り替えが起き、GT500の車両2台が映像に映し出されている。アナウンサーGはまず映し出された車両についてアナウンスし(05行目)、続けて解説者Y(由良)を名指して、前を走る本山選手が「良い」という見方に確認を求める(06行目)。

断片3(10) 2015-6 32:35

アナウンサー：G(赤平) 解説者：Y(由良)、P(光貞)

((カメラの切り替え、映像はGT300の車両からGT500車両に変わる))

- 05 G でそのうしー(0.5)あつとこちらGT::500クラスです..h(え)〈本山〉(1.0)そのうしろからレイブリッグ=
- 06→ =本山も:>由良さん<良いんじゃないですか?>これ<
- 07⇒Y [いやすごく良いですね::.
- 08 (0.7)
- 09 G 早くもギャップを広げているこの[本山です.
- 10 P [もういま、(.)全体ベストで:::(.)走ってますからね::.

Gの見方に対して、Yは「すごく良い」とアップグレードしているだけでなく(Pomerantz, 1984)、冒頭の「いや」によって、自身の見方が先行するGの見方に依存していないことを主張しているように聞こえる³。その一方で、Yは自身の見

³ 異なる連鎖環境ではあるが、串田&林(2015)では、W質問に対する応答において、話者はどのように発話冒頭の「いや」を用いて先行する質問に抵抗を示すかが分析されている。

解を、Gの「良い」の繰り返しに留めている。これは、これまで見てきた解説者の応答とは対照的である。その後、Yは発話を続けず0.7秒の沈黙が生じる(08行目)。それに対して、GはYの意見を追求せず、本山選手が有利という趣旨の締めくくりを行っている(09行目)。つまりYはGの見方を繰り返して同意とすることによって、さらなる発話がないことを暗に示している。そしてその後の沈黙によって、Yの発話が同意だけで完結している可能性がさらに高まり、それを手がかりにアナウンサーが締めくくりに踏み込んだのである⁴。このように、アナウンサーの指名質問は、同意によって応答されることもある。解説者はアナウンサーの見方をそのまま用いて同意することによって、理由を述べることなく解説の提供を回避できていることがわかる。

4. おわりに

本研究は、アナウンサーが映像内の状況に対する自身の見方に確認を求めることによって、解説者から専門家としてのコメントを引き出すプラクティスを分析した。カーレース実況放送の場合、見どころとなる出来事がコースに散在しやすく、カメラの切り替えによって映し出された映像を瞬時に把握することがしばしば困難である。このような映像に対して、アナウンサーは素早く視聴者に的確な解説や見方を提供する必要に迫られる。その一方で、解説者は競技の専門家として期待されているが、刻一刻変化する状況に対して、常に確たる見解を持っているとは限らない。つまり解説者の専門家としての立場は、アナウンサーの質問によって脅かされうる状況に置かれている。このジレンマに対して、アナウンサーが行っているのは、出来事や状況に対する自身の見方を述べ、それを解説者に差し向けることである。それに対して、解説者はその時点で言える見解を持っていれば、それを応答で述べればよく、なければ、アナウンサーへの同意として発話を完結させればよい。このようなやり方によって、視聴者に映像内の状況に解説を提供する必要性と、解説者が実際に確たる見解を持っていない可能性とのジレンマが対処されていることがわかった。

本研究は自身の見方に対する確認要求という形式に注目したが、アナウンサーの質問は、たとえば「どう」のようなW質問の形式をとることもある。これらの異なる質問形式はどのように使い分けられるのだろうか。おそらくそれは、直前の出来事や現在の状況に対する解説者の知識状態とは無関係ではない。また、やりとりの進行中にも映像は目まぐるしく変化し、アナウンサーと解説者はしばしば発話を映像と結びつける必要があるが、それがどのように行われるか。これらを今後の課題とする。

参考文献

- Drew, Paul & Heritage, John (1992). Analyzing Talk at Work: An Introduction. In P. Drew and J. Heritage (eds.) *Talk at Work*. pp. 3-65. Cambridge: Cambridge University Press.
- 是永論 (2012). メディア上の表現行為をどのように分析・評価するか: スポーツ実況放送を事例に 日本マス・コミュニケーション学会 2012 年度秋季研究発表会研究発表論文
- 串田秀也・林誠 (2015). WH 質問への抵抗: 感動詞「いや」の相互行為上の働き 友定賢治(編) 感動詞の言語学, pp. 169-211. ひつじ書房
- 三宅和子 (2004). スポーツ実況放送のフレーム - 放送に向けられた視聴者の不快感を手がかりに- 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰(編) メディアとことば 第1巻 「マス」メディアのディスコース, pp. 94-126. ひつじ書房
- Pomerantz, Anita (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action*, pp. 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- 劉礫岩・細馬宏通 (2017). カーレース実況における発話による出来事の指し示し - 「こ」系指示表現と間投詞「ほら」の相互行為上の働き- 質的心理学研究, 16, 46-62.
- Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel, & Jefferson, Gail (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4). 696-735.
- Schegloff, Emanuel (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 岡田光弘 (2002). スポーツ実況中継の会話分析 橋本純一(編) 現代メディアスポーツ論, pp. 163-195. 世界思想社

⁴ 興味深いことに、指名されていないもう1人の解説者Pが、Gの見方、つまり本山選手がどのように良いかに関する情報を提供している(10行目)。「全体ベストで走っている」とは、同クラス(全体)において最も速いタイム(ベストタイム)を意味する。つまり評価確認を向けられていないPがYに代わってコメントを付け足しており、アナウンサーの確認要求をコメントを引き出すものとして理解している。